『海』第二期第三十号発行記念小特集

「海～春夏秋冬」

『海』第二期の創刊は、平成二十一年（二〇〇九年）六月二十日のことでした。

『海』第一期（当初は『海』）は昭和六十二年（一九八七年）九月一日に創刊。季刊で出発したが、不定期刊となり、終刊となったのは、平成二十年（二〇〇八年）十二月一日発行の第六十七号をもってのことで、二十二年存続しました。

『海』第一期終刊の経緯についての詳しい事情は知らないものの、創刊当初に福岡中州の喫茶店「ぼんくら」に群れていた血気盛んな諸氏も年齢を重ね、櫛の歯が抜けるように欠けていった、ということが主因ではないかと推測されます。

『海』第二期のホームページに、『海』第一期についての記述があり、『熱き仲間たちの、連日連夜をも、ものともしない論戦のエネルギーの中から、熱き思いの文学を語るため、詩や評論などを主に発表する場として、同人誌を立ち上げました。その『海』は、激しいエネルギーの交錯と昇華の過程において、多くの優れた文芸作品を世に送り出し、社会的にも高く評価され、その存在を広く知らしめるところとなりました。しかし、近年、初期のエネルギーのなにものかを知る同人も減り、当初目指してきた誌の役割を終えたものと判断し』やむなく終刊することになった、との言葉があります。

残された者たちは、議論の場を失い、発表の場を失ったのです。それに直面した数人が、発表の場を求めて再興を図ろうとしました。呼び掛けを行ったものの、常時三十人近くいたメンバーを引き戻すべくもなく、平成二十一年に九人で再興することになります。誌名は『海』の他にこれを超えるものはなく、「『海』第二期」を名乗ることにしました。

発行部数や編集などの手順は、『海』第一期の終盤の方法を習うことにし、志は「オンリーワンを目指す」という高い目標を掲げたものの、これまでの中核を担ってきたメンバーを欠き、暁闇（ぎょうあん）の中での手探りのスタートとなりました。

その『海』第二期が十五年を迎え、第三十号を発行することになったのです。覚束ないまま出発したものの、幸いに、全国的レベルの幾人かの同人の参加を得て、現在に至っています。『海』第二期は、今後一層の飛躍を期するものですが、それは『海』第一期から続く「海の詩魂」とでもいうべき熱きものへの、さらなる深化に向けた個々の探求に掛かるものだと思います。

同人二ページの自由記述による、「海～春夏秋冬」と題した『海』第二期第三十号発行記念の小特集を組んでみましたが、「海」という意味は「産（うみ）」でもあり、「原初の海」でもあり、「天空の海」の意でもあります。これから何を産み出し得るものであるか、おおいに楽しみにしています。（有）